The Japanese Journal of Experimental
Social Psychology. 1984, Vol. 24, No. 1, 93-103

〔資　　料〕

孤独感とペットに対する態度[1)]

名古屋大学
諸　井　克　英

問　　題

Peplau ら UCLA の研究グループは，孤独感について，「個人の社会的関係のネットワークが願望よりも小さかったり，不満足なものであるときに，孤独感は生起する」(Peplau & Perlman, 1979) と定義し，UCLA 孤独感尺度を作成した (Russell *et al.*, 1978; Russell *et al.*, 1980)。その後，この尺度を用いたさまざまな研究が行われている。わが国においても，工藤・西川 (1982) によって，UCLA 孤独感尺度の信頼性および併存的妥当性の検討が行われ，その両者について肯定的な結果が得られている。

この尺度を用いて行われた諸研究から，次のような高孤独者の社会的行動の特徴が指摘されている。すなわち，自己の対人関係上の問題として社交性の抑圧を挙げる (Horowitz & French, 1979)，自己開示傾向が低い (Berg & Peplau, 1982; Solano *et al.*, 1982)，自尊心が低い (Russell *et al.*, 1980; 工藤・西川, 1983) と同時に，他者をネガティブに評価し，他者も自己をネガティブに評価することを期待する (Jones *et al.*, 1981)，社会的比較の回避傾向がある (Hansson & Jones, 1981)，人気がなく，友人のうちで最も親しい間柄にある者との親密さの程度が低い (Williams & Solano, 1983)，相互作用時にパートナーへの注意が少ない (Jones *et al.*, 1982) などが，それである。

以上の知見から明らかなように，孤独感は，単に，「社会的接触の要求水準と達成水準との間のずれ」(Peplau & Perlman, 1979) の状態であるばかりでなく，対人的不適応と深く関係していると考えられる。

ところで，孤独感は大学生活にも深く関わっている。Cutrona (1982) は，大学新入生の追跡研究において，入学後半年近くで孤独感に低減傾向があることを見出した。工藤・西川 (1983) も，大学1年生と3年生との比較から，男子1年生の孤独感が高いことを報告している。これらは，いずれも，大学という新しい環境への適応のあり方に孤独感が関わっていることを示唆している。

以上の知見を考慮して，本研究では，大学生の孤独感と大学生活上の諸特徴との関係について基礎資料を得ることを目的の一つとする。

ところで，Levinson は，ペットの心理学的重要性を指摘し (1962)，障害児治療の助けとして臨床場面にペットを用いたり，家庭にペットを導入したりする，いわゆるペット・セラピーを提唱している (1964)。ペットとの愛情あふれる相互作用がもたらす心理学的効果は，また，教育場面にも活用できるであろう (牛越充, 1979, 非行少年と犬との交流の例)。

さらに，Levinson の考えは，社会的関係上の不適応がもたらす孤独感への対処全般に拡大できると思われる。例えば，「イヌこそほんとうに忠実な恭順な友」として，「多大な安らぎ」を与えてくれるという表現 (Lorenz, 1970) もそれを物語っている。また，内山ら (1983, 調査Ⅲ) は，高層住宅居住者の成人女性を対象とした調査で，高層部分居住者はペットの飼育比率が高いことを見出しているが (2～4階：20.0%；5～8階：16.7%；9～11階：31.5%；$x^2_{(2)}=7.13$, $p<.05$)，すまいの高層化が社会的ネットワークの縮少による孤独感をもたらすと考えれば，この所見も，社会的関係上の不適応がもたらす孤独感をペットとの相互作用を通して癒すという拡大仮説に一致するといえよう。

これに反して，下村ら (1981) は，高孤独者はペットを世話する傾向が低いことを見出している。しかし，現実のペット飼育の状況が，心理学的動機によるとともに，すまいの形式や他の家族成員の同意などにも規定されることから，ペットの世話の有無を指標に採るのは必ずしも適切とはいえない。

Templer *et al.* (1981) は，ペットに対する態度を測定する18項目から成るペット尺度を作成した。もし拡大仮説が正しければ，そこで得られるペットに対する態度

1) 本論文作成にあたり，名古屋大学文学部辻敬一郎教授に御指導を賜わった。また，調査実施の際には，名古屋大学教養部鈴木正彌教授および後藤倬男助教授の御協力をいただいた。ここに深く謝意を表します。

と孤独感との間には正の関係がみられるはずである。逆に負の関係が認められるならば，下村ら（1981）の知見を支持することになる。

本研究の第二の目的は，Templer *et al.*（1981）のペット尺度の邦訳版を作成して，それに検討を加え，UCLA 孤独感尺度との関係を調べることである。

以上の二つの目的に従って，大学生を対象とする調査を行った。

方　　法

調査対象および調査の実施

国立大学および私立大学（以下，それぞれ，A大，B大と略す）の教養部における「心理学講義」の受講生（1，2年）を対象とした（無記名）。分析の対象とした被調査者数は301名である（A大サンプル：男子127名，女子81名；B大サンプル：男子81名，女子12名）。なお，不適切な回答のために，測度によって，有効ケース数は異なる。調査の実施期間は，1983年6月下旬および7月上旬である。

質問紙の構成

質問紙は，次の質問項目から構成されている。

①回答者の基本的属性：年齢，学年，学部，家族構成について尋ねた。

②親との関係：次の点について尋ねた。親との会話の程度（「ひんぱんにある」5点～「ほとんどない」1点），現在のすまい（自宅・下宿），帰省に要する時間，1年あたりの帰省回数。

③大学生活：大学内・外での生活に関する次の点について尋ねた。大学で過ごす1週あたりの時間，大学で誰かと行動をともにしている割合（「いつもともにしている」5点～「ほとんどともにしていない」1点），大学内の雰囲気（相互扶助の雰囲気，あいさつを交す雰囲気，および全体的雰囲気について，それぞれ，5点尺度で評定させ，合計得点を算出した。ポジティブ方向15点～ネガティブ方向3点。α 係数＝.808），大学内・外でのサークル活動の加入の有無，活動に費やす1週あたりの時間，活動への熱意（「かなり熱心である」5点～「かなり不熱心である」1点），大学内・外の友人・親友数（同性，異性）。

④UCLA 孤独感尺度：Russell *et al.*（1980）による改訂版を用いた。項目の訳出にあたっては，工藤・西川（1983）の研究を参考にしたが，幾分，表現は異なる。20項目のそれぞれについて，日頃自分が感じている程度を，「しばしば感じる」から「決して感じない」の4点尺度で評定させた。得点は，孤独感が強いほど高得点になるようにした（1点から4点）。

⑤ペット尺度：Templer *et al.*（1981）が用いた18項目から成るペット尺度を邦訳し，それぞれの項目が自分自身の考えや気持ちにどのくらいあてはまるかを，「かなりあてはまる」から「ほとんどあてはまらない」の5点尺度で評定させた。得点は，ペットに対する態度が好意的であるほど高得点になるようにした（1点から5点）。

⑥ペット飼育の有無：ペットを自分で飼っているか（自己飼育），家族で飼っているか（家族飼育），あるいは何も飼っていないか（非飼育）を尋ねた。さらに，自己飼育群については，飼っているペットの種類および飼育動機について自由記述させた。

⑦生き物の死についてのイメージ：生き物が死んでいるのを見たときの気持ちを，「悲しい」，「不快な」，および「当然な」のそれぞれについて，「かなりあてはまる」（5点）から「ほとんどあてはまらない」（1点）の5点尺度で評定させた。

なお，孤独感尺度およびペット尺度については，項目の配列順の効果がないことを確認するために，項目順序の異なる四つのタイプの質問紙を用いた。

結果と考察

孤独感尺度の検討

（1）信頼性および尺度得点

尺度の内的整合性を検討するために，まず，孤独感尺度を構成する20項目について，GP 分析を行った。尺度合計得点の上位28.0%（84名，48～71点）と下位28.3%（85名，23～35点）を，それぞれ，上位群および下位群として比較した結果，20項目すべてで0.1%水準で有意差が見出された（t＝5.85～15.43，df＝100.93～167，分散が同質でないと認められたときには，Welch の法を用いた）。さらに，当該項目得点と当該項目を除く総和得点との間の相関も，すべての項目で0.1%水準で有意であった（r＝.248～.676）。したがって，20項目はいずれも高い弁別力を持つと考えられる。

次に，尺度全体としての内的整合性を検討した。α 係数は.897，また，孤独方向項目（10項目）と反孤独方向項目（10項目）とに折半した場合のスピアマン－ブラウンの信頼性係数は.762であった。

したがって，工藤・西川（1983）と同様に20項目の合計得点を孤独感尺度得点とすることは妥当だと結論できる（得点範囲：20～80点）。なお，項目順序の異なる四つのタイプの間には，合計得点の差がみられなかった（F＝1.15，df＝3/296，$n.s.$）。

大学，学年および男女別の尺度得点の平均値を Table

1に示す。A大サンプルではB大サンプルよりも孤独感が有意に高い（$t_{298}=4.17$, $p<.001$）。サンプル別に，男女差，学年差，文系一理系差についても検討したが，何の傾向も見出せなかった。

このサンプル差は，B大サンプルでは，A大サンプルよりも，大学で誰かと一緒にいる割合が高く（$t_{241.91}=8.39$, $p<.001$），親友総数も多い（$r_s=.228$, $df=299$, $p<.001$）という傾向と対応している。しかし，この差については，私立大学と国立大学という違い以外にも種々の要因が考えられるので，今後の検討を待つとして，本研究ではサンプル別の分析も行うことにする。

Table 1
UCLA 孤独感尺度得点

		N	平均値（SD）
全体		300	41.75（9.52）
A大サンプル		208	43.23（9.10）
1年	男子	54	43.07（9.29）
	女子	44	42.43（9.90）
2年	男子	73	43.93（9.02）
	女子	37	43.02（8.21）
B大サンプル		92	38.39（9.65）
1年	男子	71	39.21（10.10）
	女子	12	36.33（8.06）
2年	男子	9	34.67（6.95）

（2） 孤独感と諸測度との関係

孤独感と諸測度との関係を検討するにあたり，当該測度のデータの分布によってピアソン相関かスピアマン相関のいずれかを用いた。相関についての結果を，Table 2と Table 3 に示す。

①家族　工藤・西川（1983）は，母親健在者はそうでない者に比べて孤独感が低いことを見出している。本調査では，親が健在でない者が少数であったので（父親不在者：3.3%；母親不在者：0%），その点の分析はしなかった。また，彼らの所見では，高孤独者は両親との関係をネガティブに認知する傾向がみられたが，本調査でも，A大一女子では，高孤独者は親とのコミュニケーションに乏しいことを示す有意な相関が得られた。

Table 2
UCLA 孤独感尺度得点と大学生活に関する諸測度との関係

Pe：ピアソン相関 Sp：スピアマン順位相関			全体	A大サンプル 全体	A大サンプル 男	A大サンプル 女	B大サンプル 全体	B大サンプル 男	B大サンプル 女
	帰省に要する時間	Sp	.121 (84)	.068 (53)	.148 (40)	−.509[d] (13)	.087 (31)	.049 (27)	1.00[a] (4)
	帰省回数（1年あたり）	Sp	−.215[c] (84)	−.095 (53)	−.117 (40)	.244 (13)	−.266 (31)	−.304 (27)	.316 (4)
	親との会話	Pe	−.141[c] (300)	−.151[c] (208)	−.040 (127)	−.308[b] (81)	−.117 (92)	−.082 (80)	−.267 (12)
	大学で過ごす時間（1週あたり）	Sp	.149[b] (298)	.039 (208)	−.003 (127)	.131 (81)	−.017 (90)	−.051 (78)	.218 (12)
	大学で誰かと一緒にいる割合	Pe	−.380[a] (299)	−.341[a] (208)	−.389[a] (127)	−.251[c] (81)	−.295[b] (91)	−.299[b] (79)	−.065 (12)
	大学内の雰囲気	Pe	−.348[a] (300)	−.387[a] (208)	−.299[a] (127)	−.580[a] (81)	−.309[b] (92)	−.271[c] (80)	−.625[c] (12)
サークル 大学内	時間（1週あたり）	Sp	.087 (181)	−.030 (131)	.125 (76)	−.303[c] (55)	.185 (50)	.213 (38)	.127 (12)
サークル 大学内	熱心さ	Pe	−.064 (182)	−.175[c] (131)	−.088 (76)	−.321[c] (55)	.014 (51)	.041 (39)	−.005 (12)
サークル 大学外	時間（1週あたり）	Sp	.081 (40)	−.024 (29)	−.180 (20)	.339 (9)	.151 (11)	−.124 (8)	.866 (3)
サークル 大学外	熱心さ	Pe	−.015 (41)	−.167 (30)	−.340 (21)	.081 (9)	.380 (11)	.456 (8)	.866 (3)
友人・親友数次元得点		Sp	−.433[a] (300)	−.407[a] (208)	−.437[a] (127)	−.357[a] (81)	−.475[a] (92)	−.467[a] (80)	−.513[d] (12)

（　）内：有効ケース数

a：$p<.001$
b：$p<.01$
c：$p<.05$
d：$p<.10$

Table 3
UCLA 孤独感尺度得点と友人・親友数との相関　―スピアマン順位相関―

			全体	A大サンプル 全体	A大サンプル 男	A大サンプル 女	B大サンプル 全体	B大サンプル 男	B大サンプル 女
友人数	大学内	同性	−.223[a] (295)	−.270[a] (204)	−.331[a] (125)	−.188[d] (79)	−.298[b] (91)	−.241[c] (79)	−.622[c] (12)
		異性	−.230[a] (295)	−.273[a] (204)	−.277[b] (125)	−.234[c] (79)	−.279[b] (91)	−.244[c] (79)	−.551[d] (12)
	大学外	同性	−.266[a] (293)	−.220[b] (203)	−.223[c] (125)	−.228[c] (78)	−.333[a] (90)	−.308[b] (78)	−.499[d] (12)
		異性	−.269[a] (293)	−.221[b] (203)	−.261[b] (125)	−.134 (78)	−.321[b] (90)	−.271[c] (78)	−.460 (12)
親友数	大学内	同性	−.402[a] (298)	−.403[a] (207)	−.412[a] (127)	−.388[a] (80)	−.278[b] (91)	−.324[b] (79)	−.101 (12)
		異性	−.202[a] (298)	−.230[a] (207)	−.263[b] (127)	−.167 (80)	−.244[b] (91)	−.236[b] (79)	−.249 (12)
	大学外	同性	−.408[a] (298)	−.387[a] (207)	−.344[a] (127)	−.456[a] (80)	−.328[b] (91)	−.401[a] (79)	.263 (12)
		異性	−.208[a] (298)	−.191[b] (207)	−.220[c] (127)	−.126 (80)	−.157 (91)	−.124 (79)	−.323 (12)

(　) 内：有効ケース数

a：$p<.001$
b：$p<.01$
c：$p<.05$
d：$p<.10$

きょうだい構成に関しては，A大一男子で，中間子および一人子の孤独感が高い傾向性が認められた（一人子：47.00; 長子：42.19; 中間子：49.70; 末子：43.77; $F=2.32$, $df=3/123$, $p<.10$）。中間子の傾向は長子と末子との間で「板ばさみ」の状態にある結果だとも推測できるが，この点はきょうだい数が統制可能な多人数サンプルでの吟味の必要があろう。

②すまい　A大一女子の場合，学年にかかわらず，下宿者は自宅通学者よりも孤独感が有意に低く（37.92 vs 43.62, $t_{79}=2.11$, $p<.05$），B大一女子の場合も有意ではないが同様の傾向が認められた（32.25 vs. 38.25）。さらに，前者では，実家との時間的距離が長いほど孤独感が低くなる傾向性を示す相関が得られた。

Cutrona (1982) は，すまいの違い（キャンパス内に寄宿，キャンパス外に下宿，親と同居）による孤独感の差がないとしている。わが国の女子学生にみられる地元志向性を考えれば，本調査の結果は，孤独感の低い女子が親元を離れて大学生活を送る傾向を示唆しているのかもしれない。

③大学生活　B大一女子を除き，高孤独者は大学内で一人でいる割合が高いことを示す有意な相関が見出された。また，一般に，高孤独者が大学内の雰囲気をネガティブに認知する傾向を示す有意な相関が得られた。

前者の所見は，高孤独者は一人でいる割合が高いという Russell *et al.* (1980) や工藤・西川 (1983) の知見が，大学での行動にもあてはまることを示している。また，内山ら (1983, 調査Ⅱ) は，高層住宅居住者の成人女性について，団地内に友人の少ない者が団地内の雰囲気をネガティブに認知する傾向を見出しているが，これは後者の傾向に対応しているといえよう。

Russell *et al.* (1980) は，孤独感と社会的活動への参加との間に負の関係があると報告している。しかし，本調査で大学内・外のサークルの加入者，離脱者および未加入者の3群を比較したかぎりでは，孤独感の程度に差は認められなかった。ただし，A大一女子の大学内サークル加入者では，高孤独者は活動に費やす時間が少なく，不熱心であることを示す有意な相関が見出された。

諸井 (1982) が音楽系サークル集団を対象として行った調査では，離脱希望者はサークル内の人間関係をネガティブに認知する傾向があった。この所見からは，現実にサークルから離脱すると孤独感が強まるという推測が導かれるが，今回の調査では，A大一女子の場合の相関傾向を除いて，この推測は支持されなかった。

④友人・親友関係

i) 友人・親友数　Russell *et al.* (1980) および工藤・西川 (1983) は，孤独感と友人数との間に負の相関があると報告している。本調査の結果は Table 3 に示す。

まず，友人数との相関をみると，女子の大学外一異性

を除いて，一般に，高孤独者は友人数が有意に少なかった（ただし，A大一女子の大学内一同性，B大一女子の大学内一異性および大学外一同性では傾向性のみ）。親友数との相関については，B大一女子には何の傾向も認められなかったが，A大一女子の大学内・外の異性およびB大一男子の大学外一異性を除けば，高孤独者は親友数が有意に少なかった。

また，B大サンプルでは，女子の人数が少ないために，明確な傾向は得られなかったが，A大サンプルでは，大学内・外にかかわらず，異性よりも同性の親友数のほうが孤独感との関係が強い傾向が認められた。これは，接触量や満足度において，友人，恋人，家族の順に孤独感との関係が強いという Cutrona (1980) の知見と一致している。

Wheeler *et al.* (1983) は，男女学生に10分以上続いた相互作用を7～18日間にわたって自己記録させ，被験者の性にかかわらず，女性パートナーとの相互作用時間と孤独感との間に負の関係があること，および男性パートナーとの相互作用の意義 (meaningfulness) と孤独感との間に負の関係があることを見出している。本調査においても，A大サンプルでは，異性の友人・親友数について，男子の場合には女子よりも孤独感との相関が高く，彼らの知見に一致している。

同性に限れば，B大一女子を除き，友人数よりも親友数のほうが孤独感との関係が強い。ところで，Peplau & Perlman (1979) は，孤独感への対処の一方策として「友人として認められる基準の変化」を挙げている。親友よりも友人のほうが基準を歪曲一拡大し易いことを考えれば，当然，友人数と孤独感との関係はあいまいになる。したがって，人数を基準とする本調査の結果から，友人よりも親友のほうに重みがあると単純には結論できない。

ii) 友人・親友数パターン　個人の社会的ネットワークの一指標として，友人・親友数パターンを得るために，それぞれの頻度分布を考慮して，友人・親友数をカテゴリー化し，林の数量化Ⅲ類による分析を行った（欠損値は最頻カテゴリー項目に含めた）。

固有値が高く，軸の解釈に際し十分意味のある解釈が可能な第1根のみを分析に用いた（第2根：$\rho^2=.250$）。結果は Table 4 に示す。第1根は，友人・親友数が多いカテゴリー項目ほどウェイトが大きくなる傾向があるので，友人・親友数次元と命名した。

また，この次元のケース得点を算出し，孤独感尺度得点との相関を求めると（Table 2），一般に，高孤独者は友人・親友数次元得点が有意に低い傾向があった。

Table 4
友人・親友数パターン　一林数量化Ⅲ類の結果一

$N=301$

			頻度	第Ⅰ軸
友人数	大学内	同性		(2.683)
		9人以下	53	−1.386
		10～19人	98	−0.513
		20～29人	72	0.312
		30人以上	78	1.297
		異性		(2.662)
		0人	116	−0.933
		1～5人	89	−0.228
		6～10人	49	0.965
		11人以上	47	1.729
	大学外	同性		(2.850)
		9人以下	75	−1.394
		10～19人	91	−0.553
		20～29人	52	0.653
		30人以上	83	1.456
		異性		(3.138)
		0人	80	−1.436
		1～5人	102	−0.361
		6～10人	51	0.704
		11人以上	68	1.702
親友数	大学内	同性		(2.308)
		0人	78	−0.887
		1人	53	−0.944
		2人	71	0.149
		3人	40	0.705
		4人以上	59	1.364
		異性		(2.646)
		0人	246	−0.367
		1人	29	1.073
		2人	14	2.279
		3人以上	12	2.269
	大学外	同性		(2.740)
		0人	45	−1.470
		1人	47	−1.204
		2人	67	−0.129
		3人	45	0.181
		4人以上	97	1.270
		異性		(3.086)
		0人	181	−0.722
		1人	55	0.364
		2人	36	1.169
		3人以上	29	2.364
			ρ^2	.427

（　）内：レンジ

ペット尺度の検討

（1）　信頼性

尺度の内的整合性を検討するために，ペット尺度を構成する18項目について GP 分析を行ったが（上位群75名 vs 下位群78名），項目9と13では上位群と下位群との間にまったく差は見出せなかった。また，当該項目得点と当該項目を除く総和得点との相関を調べても，これら二つの項目は無相関であった。したがって，項目9と13は除外した（なお，項目9と13との相関は $r=.010$ である）。

次に，残りの16項目について GP 分析を行なったと

Table 5
ペット尺度項目と項目分析（2回目）の結果

N=300

(+)：正方向項目 (−)：負方向項目		平均値 (SD)	当該項目を除く総和との相関(b)	GP分析(a)(b) 上位群：64-78 下位群：23-46
1. 私は，ペットがエサを喜んで食べるのを見るのがたいへん好きである。	(+)	3.96 (1.02)	.582	t=11.55 df=119.43
2. 私にとっては，ペットは友達以上に大切なものである	(+)	2.31 (0.99)	.566	t=11.73 df=140.92
3. 私は，家庭でペットを飼うのが好きである。	(+)	3.33 (1.26)	.770	t=21.34 df=146.58
4. ペットを飼うことは，お金のむだ使いである。	(−)	3.99 (1.00)	.504	t=12.57 df=126.92
5. ペットは，生活を楽しくしてくれる。	(+)	4.00 (0.89)	.715	t=17.39 df=115.64
6. 私は，ペットはいつも戸外で飼うべきだと思う。	(−)	2.95 (1.07)	.239	t= 4.18 df=155
7. 私は，毎日ペットと遊んでいたい。	(+)	2.78 (1.12)	.660	t=16.24 df=155
8. 私は，時々ペットと話をし，ペットの気持ちをわかろうとする。	(+)	3.03 (1.29)	.710	t=18.14 df=153.36
9. 人々が，ペットの世話をするかわりに，ほかの人間のことを考えるようになれば，世の中はもっとよくなる。	(−)	3.16 (1.26)	……	……
10. 私は，自分の手で動物にエサを与えるのが好きである。	(+)	3.63 (1.19)	.724	t=16.49 df=135.82
11. 私は，ペットを愛している。	(+)	3.52 (1.19)	.830	t=21.23 df=126.07
12. 動物は，家庭で飼うよりも，野性のままにしておくか，動物園で飼うべきである。	(−)	2.85 (1.01)	.319	t= 7.03 df=152.70
13. ペットを家の中で飼おうとすれば，家具がいたむことを覚悟しなければならない。	(−)	2.40 (1.15)	……	……
14. 私は，ペットが好きである。	(+)	3.90 (1.08)	.808	t=21.23 df= 99.25
15. ペットはおもしろいが，自分で飼うほどのことはない。	(−)	3.20 (1.20)	.572	t=14.83 df=140.67
16. 私は，しばしば，ペットに話しかける。	(+)	3.10 (1.42)	.690	t=23.13 df=128.59
17. 私は，動物がきらいである。	(−)	4.15 (1.03)	.611	t=12.10 df= 95.23
18. ペットは，家族の一員と同じように，尊敬の念をもって扱われるべきである。	(+)	3.31 (1.21)	.556	t=11.63 df=155

(a)分散が同質でないと認められたときには，Welch の法を用いた。　(b)すべて p<.001

ころ（上位群75名 vs 下位群82名），Table 5 に示すように，そのすべてに0.1% 水準で有意差が認められた。さらに，当該項目得点と当該項目を除く総和得点との相関を調べても，すべての項目で0.1% 水準で有意な相関が得られた。したがって，これら16項目はいずれも高い弁別力を持つと結論される。

一方，16項目での尺度全体としての内的整合性を検討したが，α 係数は.919，また，正方向項目（11項目）と負方向項目（5項目）とに折半した場合のスピアマン―ブラウンの不等長折半信頼性係数は.764であった。

これら16項目について，主因子法による因子分析を行った。固有値の大きさおよび項目の内容を考慮して，全分散の63.5%を説明できる3因子解を採用した。直交回転後の因子負荷行列を Table 6 に示す。第Ⅰ因子はペットへの一般的愛情を示す愛好因子，第Ⅱ因子はペットとのコミュニケーションを積極的に行うことを示す交流因子，そして第Ⅲ因子は家庭でのペット飼育の肯定を示す飼育因子と命名した。

Templer *et al.* (1981) も同様の分析を行い，「love and interaction」の第Ⅰ因子（項目7，8，11，16），「pet in the home」の第Ⅱ因子（項目3，6，12，14），および「joy of pet ownership」の第Ⅲ因子（項目1，5，17）を見出している。したがって，本調査の第Ⅰ，第Ⅱ，および第Ⅲ因子は，それぞれ，彼らの第Ⅲ，第Ⅰ，第Ⅱ因子にほぼ対応しているといえよう。

Table 6
ペット尺度項目の因子分析の結果　$N=300$

項　目	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子	h^2
1	.501	.383	.064	.402
2	.205	.683	.039	.510
3	.638	.397	.343	.682
4	.469	.059	.521	.495
5	.635	.426	.132	.602
6	.008	.115	.488	.251
7	.365	.649	.076	.560
8	.288	.735	.212	.668
10	.693	.416	.077	.659
11	.636	.577	.171	.767
12	.157	.022	.643	.439
14	.735	.448	.189	.777
15	.360	.325	.386	.384
16	.259	.711	.248	.634
17	.623	.191	.283	.505
18	.333	.516	.054	.380
因子分散	3.685	3.551	1.479	8.715

以下の分析においては，16項目を合計したペット尺度得点（得点範囲：16～80点）と因子分析の結果から算出した因子得点を用いる（各因子間の相関；Ⅰ-Ⅱ：$r=.091$；Ⅰ-Ⅲ：$r=.147$；Ⅱ-Ⅲ：$r=.038$）。なお，項目順序の異なる四つのタイプの間で合計得点に差はなかった（$F=0.78$，$df=3/296$，$n.s.$）。

ところで，Templer *et al.* (1981) によれば，ペット尺度得点（18項目合計）に性差は見出されていない。本調査でも，ペット尺度得点（16項目合計）およびペット飼育の有無に性差はなかった。

（2）ペット飼育の有無

Templer *et al.* (1981) は，尺度の基準的妥当性として，動物虐待防止協会職員は福祉関係の学生よりもペット尺度得点が高いという知見を示しているにすぎない。

本調査では，ペット飼育の有無とすまいの形式（自宅，下宿）に基づいて被験者を5群に選別し，ペット尺度得点および因子得点を比較した。結果は Table 7 に示す。全体としては，自己飼育群がペットに対して最もポジティブな態度を示し，非飼育—自宅群が最もネガティブな態度を示しており，尺度の基準的妥当性を確証している。なお，自己飼育群には，下宿者は1名しか含まれていないが，これは，ペット飼育が居住条件に影響されることを顕著に示している。

ペット尺度得点は，高いほうから順に，自己飼育群，家族飼育—下宿群，家族飼育—自宅群，非飼育—下宿群，非飼育—自宅群となっている。愛好因子得点も同様の傾

Table 7
ペット尺度得点，ペット3因子得点，UCLA 孤独感尺度得点，および友人・親友数次元得点の平均値

	自己飼育	家族飼育〔自宅〕	家族飼育〔下宿〕	非飼育〔自宅〕	非飼育〔下宿〕	分散分析
ペット尺度得点	63.16^{c} (9.62) $n=44$	54.49^{b} (10.89) $n=61$	58.22^{bc} (11.29) $n=27$	49.66^{a} (11.81) $n=115$	53.35^{ab} (11.95) $n=52$	$F=12.46$ $df=4/294$ $p<.001$
愛好因子得点	0.423^{c} (0.648) $n=44$	0.086^{b} (0.819) $n=61$	0.201^{bc} (0.917) $n=27$	-0.229^{a} (0.908) $n=115$	-0.057^{ab} (0.907) $n=52$	$F=5.30$ $df=4/294$ $p<.001$
交流因子得点	0.386^{c} (0.847) $n=44$	-0.114^{ab} (0.890) $n=61$	0.256^{bc} (0.818) $n=27$	-0.152^{a} (0.898) $n=115$	0.031^{ab} (0.801) $n=52$	$F=3.94$ $df=4/294$ $p<.010$
飼育因子得点	0.498^{d} (0.590) $n=44$	0.203^{c} (0.674) $n=61$	0.101^{bc} (0.743) $n=27$	-0.277^{a} (0.747) $n=115$	-0.110^{ab} (0.946) $n=52$	$F=10.27$ $df=4/294$ $p<.001$
UCLA 孤独感尺度得点	40.35 (10.43) $n=43$	42.25 (7.94) $n=61$	38.78 (9.88) $n=27$	42.40 (9.30) $n=115$	42.57 (10.62) $n=53$	$F=1.17$ $df=4/294$ $n.s.$
友人・親友数次元得点	0.221 (0.722) $n=44$	0.006 (0.602) $n=61$	−0.054 (0.726) $n=27$	−0.071 (0.646) $n=115$	−0.001 (0.621) $n=53$	$F=1.65$ $df=4/295$ $n.s.$

（　）内：*SD*　異なる英文字は，5％水準で（最小有意差法），互いに有意に異なることを示している。

向を示す。ところが，交流因子得点では，家族飼育—自宅群の得点が低く，最も低い非飼育—自宅群との間に差はない。また，飼育因子得点では，愛好因子得点と比べて，有意ではないが，家族飼育—自宅群と家族飼育—下宿群の順が異なっている。したがって，三つの因子得点は，家族飼育—自宅群と家族飼育—下宿群とを弁別する測度であると考えられる。

（3） 生き物の死についてのイメージ

生き物の死についてのイメージとペット尺度得点および3因子得点との関係を Table 8 に示す。生き物の死に際して，ペット尺度得点の高い者は，悲しいが不快とはいえないとする有意な傾向があった。愛好因子および交流因子においても同様な有意な傾向があった。また，飼育因子得点の高い者は，不快でないとする有意な傾向および当然ではないとする傾向性があった。

Keddie (1977) は，ペットの死が，肉親や親友の死と同様に，精神病理的な「悲嘆反応」を生じた症例を報告している。ペットに対するポジティブな態度と生き物の死についてのアンビバレントなイメージ（つまり，悲しいけれども，不快ではなく，当然でもない）との結びつきを示す本調査の結果は，彼の報告に関係した知見であるといえよう。

Table 8
生き物の死に直面したときの気持ちとペットに対する態度との関係　—ピアソン相関—

	ペット尺度得点	愛好因子得点	交流因子得点	飼育因子得点
悲しい	.393[a] (291)	.367[a] (291)	.265[a] (291)	.063 (291)
不快な	−.233[a] (290)	−.122[c] (290)	−.198[a] (290)	−.124[c] (290)
当然な	−.081 (289)	−.047 (289)	−.009 (289)	−.116[d] (289)

（　）内：有効ケース数

a：$p<.001$
b：$p<.01$
c：$p<.05$
d：$p<.10$

孤独感とペットに対する態度との関係

（1） 孤独感および友人・親友数とペット飼育との関係

孤独感尺度得点および友人・親友数次元得点に関して，先の5群間の比較をしたが（Table 7），いずれも有意な傾向は見出されなかった。また，下村ら（1981）に従って，被験者を高孤独群と低孤独群とに被験者を分割しても，孤独感とペット飼育との関連は見出せなかった。しかし，孤独感尺度得点とペット尺度得点との間には，高孤独者がペットに対してネガティブな態度を持つ傾向を示す有意な負の相関があった（全体：$r_{297}=-.290$, $p<.001$; A大：$r_{206}=-.278$, $p<.001$; B大：$r_{89}=-.239$, $p<.05$）。したがって，孤独感とペット飼育との関係に関する下村ら（1981）の知見は，直接には支持されなかったが，孤独感とペットに対する態度との関係という点では間接的にではあれ支持されたことになる。

（2） 孤独感とペットに対する態度との関係—偏相関分析—

全体およびペット飼育・非飼育5群で，ペット尺度得点および3因子得点が孤独感とどのような関係にあるかを調べるために，友人・親友数次元得点を統制変数として偏相関分析を行った。その結果は Table 9 に示す。

Table 9
UCLA 孤独感尺度得点とペット尺度得点および3因子得点との関係　—偏相関分析—
統制変数：友人・親友数次元得点

	N	ペット尺度得点	愛好因子得点	交流因子得点	飼育因子得点
全　体	299	−.203[a] (−.290[a])	−.329[a] (−.365[a])	.072 (−.030)	−.189[a] (−.207[a])
自己飼育	43	−.174 (−.344[c])	−.543[a] (−.604[a])	.210 (.007)	−.069 (−.081)
家族飼育〔自宅〕	61	−.122 (−.215[d])	−.248[d] (−.302[c])	.104 (−.028)	−.172 (−.097)
家族飼育〔下宿〕	27	−.146 (−.130)	−.154 (−.107)	.417[c] (.271)	−.084 (.052)
非飼育〔自宅〕	115	−.233[c] (−.299[a])	−.311[a] (−.341[a])	.033 (−.032)	−.245[b] (−.266[b])
非飼育〔下宿〕	52	−.407[a] (−.442[a])	−.435[a] (−.428[b])	−.067 (−.106)	−.254[d] (−.296[c])

（　）内：ピアソン相関係数

a：$p<.001$
b：$p<.01$
c：$p<.05$
d：$p<.10$

まず，全体をみると，高孤独者はペット尺度得点，愛好因子得点および飼育因子得点が低いことを示す有意な偏相関が見出された。また，友人・親友数次元得点の統制の影響はあまり認められない。

次に，5群それぞれの傾向をみる。愛好因子得点では，家族飼育—下宿群を除く4群で，高孤独者の得点が低い傾向を示す有意な偏相関（ただし，家族飼育—自宅群については傾向性のみ），また，交流因子得点では，家族飼育—下宿群にのみ，高孤独者の得点が高い傾向を示す有意な偏相関が見出された。ペット尺度得点および飼育因子得点では，非飼育の2群で，高孤独者の得点が低い傾向を示す有意な偏相関が認められた（ただし，非飼育

一下宿群の飼育因子得点については傾向性のみ)。また，愛好因子得点および飼育因子得点では，友人・親友数次元得点の統制の影響はさほど認められないが，交流因子得点では，とくに家族飼育一下宿群および自己飼育群において，統制の影響がみられる。

ペット尺度得点，愛好因子得点および飼育因子得点に関しては，孤独感との関係が下村ら（1981）の知見と対応している。しかし，家族飼育一下宿群で見出された交流因子と孤独感との関係は，孤独感をペットとの相互作用を通して癒すという考えと一致する。

ところで，自己飼育群での交流因子と孤独感との関係は，偏相関の方向では家族飼育一下宿群と同じであるのに，有意な水準には達しなかった。その理由として，帰省時にのみペットと交流できる状況にある家族飼育一下宿群とは異なり，自己飼育群ではたとえ孤独感が生じてもそれをペットとの日常の交流を通じて低減している可能性が考えられる。また，家族飼育一自宅群では，ペットに対する態度があまり好意的でないために，孤独感をペットとの相互作用を通して癒すことはないのであろう。

ペットの種類および飼育動機

自己飼育群では，ペットの種類と飼育動機について尋ねた。

ペットの種類に関しては，1人あたり1～4種類のペットが飼育されていた。犬の飼育率が最も多く(56.8%)，小鳥（36.4%），猫（25.0%）がそれにつづき，この3種類のうちいずれかを飼っている者は90.9%を占めていた（その他，金魚15.9%，昆虫4.5%，亀4.5%）。

飼育動機に関しては，1人あたり1～2種類の動機が挙げられた。ペットの可愛らしさなどの情愛動機を挙げている者が全体の52.3%を占めていた。また，飼育自体に目的をおく飼育動機，ペットに友人的役割を求める友人動機，および心の安らぎを求める心理的効用動機を挙げている者が，それぞれ，13.6%を占めていた。

結　　論

大学生の孤独感と大学生活の諸特徴との関係については，①女子の下宿生は孤独感が低い，②サークル活動の加入，離脱および未加入は孤独感と無関係である，および③社会的ネットワークを構成するものとして友人・親友数を用いたが，関係の深さ一友人か親友か一や，相手の性によって，孤独感との関係が異なる，などの興味ある傾向が見出された。これらの傾向は，Cutrona (1982) のように，大学入学時からの追跡調査によって，より明確にできるであろう。

とくに，③の傾向は，社会的ネットワークにおける個々の相互作用がもつ心理学的意義を考慮する必要があることを示唆している（Wheeler *et al.*, 1983)。また，個人の社会的ネットワークは，単に大学内・外の友人・親友ばかりでなく，親，兄弟，大学での教官，恩師，サークル成員など，広がりをもったものである。したがって，社会的ネットワークの諸次元を明確にする必要があり，その中で孤独感の生起・解消との対応づけをする必要があるといえる。また，Cutrona (1982) は，孤独感は社会的接触の頻度や数ではなく，その関係への満足度に直接関係していることを見出しており，本調査の友人・親友数を基準とした知見のみでは不十分であろう。

ところで，本調査で用いた UCLA 孤独感尺度は，孤独感の対人的定義に基づいて作成されたものである。しかし，例えば，落合（1982）は，文章完成法を用いて，孤独感の規定因は心理的条件（対他的次元，対自的次元，時間的展望次元）および物理的条件（物理的孤立状態次元）に類別されることを見出している。UCLA 孤独感尺度は項目の内容から対他的次元に主として関係していると考えられる。落合（1982）の研究では，孤独感の規定因として対他的次元反応が最も多いが，他の次元反応も無視できない程度に生じている。したがって，UCLA 孤独感尺度を用いた本調査は孤独感の狭義の定義に基づいたものであり，今後，孤独感への多次元的アプローチも必要であろう。

次に，孤独感とペットに対する態度との関係について述べる。本調査の結果は，生起した孤独感は，人間に対してばかりでなくペットに対するネガティブな態度を伴う一方で（全体，家族飼育一下宿群を除く4群），ペットへの補償的接近の動機づけを喚起する（ただし，家族飼育一下宿群のみ）ことを示している。しかし，人間関係に本来的には由来している孤独感とペットとの相互作用とがどのような関係にあるかは，サンプルの拡大（今回は大学生に限定したが）や，追跡調査（ペット飼育の動機やペットの種類なども含めて）によって，さらに明確にする必要があるといえる。

また，Templer *et al.* (1981) は，ペットに対する態度が一次元的あるいは多次元的のいずれであるかは，因子分析を行っているにもかかわらず，言及していないが，本調査の結果からは多次元的であると仮定したほうが有益であると考えられる。

引 用 文 献

Berg, J. H. & Peplau, L. A. 1982 Loneliness: The relationship of self-disclosure and androgyny. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 8, 624-630.

Cutrona, C.E. 1982 Transition to college: Loneliness and the process of social adjustment. In Peplau, L.A. & Perlman, D. (Eds.) *Loneliness: A sourcebook of current theory, research and therapy*. John Wiley & Sons.

Hansson, R.O. & Jones, W.H. 1981 Loneliness, cooperation, and conformity among American undergraduates. *Journal of Social Psychology*, **115**, 103-108.

Horowitz, L.M. & French, R.S. 1979 Interpersonal problems of people who describe themselves as lonely. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **47**, 762-764.

Jones, W.H., Freemon, J.E. & Goswick, R.A. 1981 The persistence of loneliness: Self and other determinants. *Journal of Personality*, **49**, 27-48.

Jones, W.H., Hobbs, S.A. & Hockenbury, D. 1982 Loneliness and social skill deficits. *Journal of Personality and Social Psychology*, **42**, 682-689.

Keddie, K.M. 1977 Pathological mourning after the death of a domestic pet. *British Journal of Psychiatry*, **131**, 21-25.

工藤　力・西川正之　1983　孤独感に関する研究（I）―孤独感尺度の信頼性・妥当性の検討―　実験社会心理学研究, **22**, 99-108.

Levinson, B.M. 1962 The dog as a "co-therapist". *Mental Hygiene*, **46**, 59-65.

Levinson, B.M. 1964 Pets: A special technique in child psychotherapy. *Mental Hygiene*, **48**, 243-248.

Lorenz, 1970　ソロモンの指環　日高敏隆訳　早川書房.

諸井克英　1982　大学サークル集団に関する心理学的研究―音楽系サークルを中心として―　日本グループ・ダイナミックス学会第30回大会発表論文集, 40-41.

落合良行　1982　孤独感の内包的構造に関する仮説　教育心理学研究, **30**, 233-238.

Peplau, L.A. & Perlman, D. 1979 Blueprint for a social psychological theory of loneliness. In Cook, M. & Wilson, G. (Eds.) *Love and attraction*. Pergamon Press.

Russell, D., Peplau, L.A. & Cutrona, C.E. 1980 The revised UCLA Loneliness Scale: Concurrent and discriminant validity evidence. *Journal of Personality and Social Pcychology*, **39**, 472-480.

Russell, D., Peplau, L.A. & Ferguson, M.L. 1978 Developing a measure of loneliness. *Journal of Personality Assessment*, **42**, 290-294.

下村陽一・小野章夫・工藤　力・西川正之・村井隆文　1981　孤独感に関する研究（III）日本グループ・ダイナミックス学会 第29回 大会発表論文集, 34-35.

Solano, C.H., Batten, P.G. & Parish, E.A. 1982 Loneliness and patterns of self-disclosure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **43**, 524-531.

Templer, D.I., Salter, C.A., Dickey, S., Baldwin, R. & Veleber, D.M. 1981 The construction of a pet attitude scale. *Psychological Record*, **31**, 343-348.

内山道明・辻敬一郎・原　正敏・丸山規明・三宅俊治・小俣謙二・諸井克英　1983　高層住宅居住者の意識と行動―居住環境の心理学的研究―　昭和55-57年度文部省特定研究経費成果報告書「環境認知と空間的行動に関する研究」所収.

牛越　充　1979　中学生に見る孤独感―その実態と生活指導について―　青年心理, **12**, 52-58.

Wheeler, L., Reis, H. & Nezlek, J. 1983 Loneliness, social interaction, and sex roles. *Journal of Personality and Social Psychology*, **45**, 943-953.

Williams, J.G. & Solano, C.H. 1983 The social reality of feeling lonely: Friendship and reciprocation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **9**, 237-243.

―1984年1月20日　受稿, 1984年4月21日　受理―

LONELINESS AND ATTITUDES TOWARD PETS

KATSUHIDE MOROI
Nagoya University

ABSTRACT

The main purpose of this study was to examine the relationships between loneliness and attitudes toward pets. The UCLA Loneliness Scale (Russell *et al.*, 1980), the Pet Attitude Scale (Templer *et al.*, 1981), and the College Life Questionnaire were administered to the undergraduate students (N=301) at two universities.

The following results were obtained:

1) Scores on the UCLA Loneliness Scale (α=.897) showed significant correlations with various aspects of their college lives.

2) The Pet Attitude Scale had high internal consistency (α=.919). Varimax rotation of the factor analysis (principal factor solution) produced three factors labeled "affection," "interaction," and "pet-in-the-home," respectively.

3) Loneliness scores were negatively correlated with "affection," and "pet-in-the-home" factor scores, while they were positively correlated with "interaction" factor scores.

Key words: loneliness, pet, pet attitude, pet therapy, friendship, college life, social adjustment.